日本台湾学会第3回学術大会記念講演

2001年6月2日
於　東京大学本郷キャンパス山上会館

近代性を求めて：台湾研究について考えること

呉　　乃　徳
（渡辺　剛訳）

貴会の年次大会に参加し，台湾研究に対する私の幾ばくかのよくこなれているとは言い難い反省を発表できることは，私の学術人生においてこの上ない栄誉です．特に，私は日本については非常に不案内であり，日本学術界の諸兄に教えを請う機会を持てるのは，更に得難い機会と経験です．

歴史において，台湾と日本とは非常に深い繋がりがあります．台湾の近代史は日本の植民統治から始まっています．そして，地理的にも，二つの国家は極めて近い位置にあります．しかし，私やその他の戦後生まれの多くの台湾人にとって，台湾と日本との距離は非常に隔たっており，アメリカ，それどころかヨーロッパよりも更に遠く感じるのです．但し，私の上の世代では，状況は当然異なってきます．私が子供の頃は，毎年の大晦日の夜には，父は大事にとっておいた和服を身に纏い，一家でコンロを囲んでスキヤキを食べたものでした．数年前に母が亡くなってから，私たち兄弟は，母が大切にしまっていた，50数年前に母と父とが婚前にやりとりしていたラヴレターを見つけました．しかし，我々6人の兄弟姉妹の中で，日本語が理解できる者は一人もいませんでした．愛情とは，人間性に於ける相当に気高い構成要素であります．子供達が，機会がありながらも両親の感情の世界に入り込める能力がないことは，当然の事ながら，非常に辛く悲しいことです．そして，こうした文化と歴史の断絶は，たかだか2世代の間に起きているのです．

台湾人には僅か数世代のうちに，文化，歴史そして政治経験において数度の断絶が有りましたが，台湾の知識層はむしろ一貫した関心を持ちつづけてきました．この関心，或いは，「心掛かり（焦慮）」（anxiety）は，「近代性」を追い求めることに発しています．「近代性」を成し遂げることも，台湾人が過去一世紀来，直面しつづけてきた課題なのです．故に，現段階の台湾研究を論ずるのであれば，「近代性を求める」というこの課題から説き起こさざるをえない，と私は考えます．

それぞれの国において，社会科学は芽生え始めの段階では，研究問題の設定であれ，或いは研究指向の「スタイル」と「特質」であれ，すべからくその社会が直面している特殊な課題と密接に関わることを逃れ得ません．イギリスの社会科学が芽生え始めた頃に直面した課題とは，産業

革命後の社会の有様でした．彼らの社会科学のスタイルは，中産階級の改革と進歩の理念を反映したものでした．その主な関心は政治経済学であり，そしてそのメソドロジーとは，個人を分析単位とする個人主義に傾斜したものだったのです[1]．そして，アメリカ社会科学の起源はといえば，歴史の発展が「アメリカ例外主義」（American exceptionalism）という信念にもたらした課題に向き合う為のものでした[2]．19世紀アメリカのインテリ階層の目には，アメリカのように，これほど民主的且つ平等で，政治体制は人類の理性によって設計することができ，貴族の専制を免れるだけではなく階級闘争からも免れている社会は，人類史上の例外であると映っていたのです．しかし，後の経済と政治の発展は，こうした自己アイデンティティーに強烈なインパクトをもたらしました．アメリカ社会科学の芽生えにおいて，その重要な目標とは，この種の「アメリカ例外主義」の自己アイデンティティーとイデオロギーを修正・護持或いは排斥することでした．シカゴ大学は社会学部を初めて設置したアメリカの大学です．その「シカゴ学派」と呼ばれる社会学の伝統は，実のところやはりこうした重要な問題に答える為のものであったのです．その問題とは，アメリカの自由主義は何故に失敗したのか，何故に工業化がもたらした政治・経済・社会の問題を解決することが出来なかったのか，というものです[3]．偉大な社会学者は永遠に道徳哲学者」であり[4]，全ての人間が偉大な社会科学者になることはあり得ません．しかし，社会科学の研究あるいは著作は，社会の課題，或いは人間の置かれている境遇に応えてこそ，何らかの意義を持ち得るのです．

台湾の近代性の起点は日本の植民統治です．日本の植民政権による近代教育体制と課程を通じて，台湾人は近代世界に接触したのです．そして，たかだか数十年の時間のうちに，現代世界における各種の政治・文学・芸術の思想は全て台湾のインテリ階層の注目と議論の的となりました．近代世界の文化活動・文学・音楽と美術といったものは，全て台湾に根を下ろしたのです[5]．「近代性」の追求は当時の台湾人のブームとなりました．この頃の台湾人は，あたかも青春期真っ盛りの人間のようであり，目を見開き，世界に対して好奇心で溢れており，知識を求めることに熱狂していました．「文化協会」は反植民地運動ではありましたが，更に重要なのは，この運動がインテリ階層による一般民衆を対象とした啓蒙運動であったことかもしれません．第二次世界大戦が始まる頃になると，600万の台湾人の中で，既に5万人近くが日本の大学を卒業していました．これは，なんと僅か20数年の間に成し遂げられたことなのです．

これは台湾人の啓蒙時期であり，近代性の追求の始まりでもあり，インテリゲンチャの焦慮の始まりでもありました．「近代性」が指しているのは，「人間の自覚と自立性；世界に対して好奇心を抱き，自己の判断に自信を持ち，教条的なものを疑い，権威に反逆し，自己の信念と行為に責任を負い，古典の過去に触発されると同時に偉大な未来に身を捧げ，自らの人間性に誇りを感じ，自分が自然とは別の存在であると認知し，創造者として具える芸術のパワーを体得し，自身が自然に対する知識理解力と操る力を確信する」[6]ことなのです．

この種の近代性の追求は，一貫して台湾のインテリゲンチャの期待と焦慮の的でした．林攀龍（林獻堂の長男）が或いは良い例かもしれません．彼は，1920年代に東京帝国大学・オックスフォード大学を卒業した後に，前後してパリ大学・ミュンヒェン大学で引き続き研鑽を積みまし

た．1929年の「欧州文化の優越性」という文章の中で，林は次のように書いています；「生活の科学化を我々に顕示したのは誰であろう？女性と男性とを同等に取り扱わねばならないと教えたのは誰であろう？我々が一切の社会問題・政治問題に対して覚醒するよう促したのも誰であろうか？…西欧文化には生きている人間の奥深い喜びが含まれている．それは東方の文明とは異なっており，人の命を重視し，人生の理由を肯定する．…人生の肯定と生命の尊重を我々に教えたのは，東洋文明ではない…人生の肯定の基礎の上に，人生を善化・美化し，四海同胞の精神を徹底させ，蕃紅花（クロッカス）を大地の砂漠の上に開かせるものが西欧文化の精神なのである」．彼が1932年に一新会を設立した際には，上述の西欧文化への憧れを以って，「台湾の革新はとうの昔に接木や移植の問題ではなくなっている．それは実に土地自身の問題なのである．大衆の魂の土地の上に文化の種をまこうではないか」[7]と書いています．台湾人の歴史的使命は，制度の学習のみではなく，文化心理上全般の改造に在るべきで，「近代の魂」（modern mind）に改造を遂げるべきであると述べているのです．

この種の「近代の魂」は同時に人間の「自覚」（self–conscious）と人間の「自立性」（autonomous）を含んでいます．この二つは分割することのできない側面であり，一体となった近代性の二つの面です．一方では，或る人間が，彼に知識と芸術の能力が有り，社会体制を改造する能力の有る固体であると覚醒すると，他方では，こうした自覚と能力によって，彼は政治と社会体において独立した自立性を享受することを期待するようになります．この種の自立性は，彼に政治の専制と国外勢力の支配を受け入れがたくさせるのです．民主改革と民族主義運動は，全てこの同じ根を持つ「近代の魂」を反映したものです．これはまた，1980年代に東欧の全体主義体制が崩壊に直面した際に，多くの地域で民主運動と同時に民族主義運動が見られた理由なのです．台湾においても類似した眺望を目にすることができます．

この種の近代の魂の追求は西欧（古典時期を含む）の文化思想と法文や制度を模範とするものでした．後進地域のインテリゲンチャは先進文明に相対した際に，完全に逆の反応をする可能性もあります．すなわち，先進文明を排斥し，自己の伝統の中に回帰することから自己のアイデンティティーを確立するのです．ガンヂーはその中でも有名な例です．この種の反動は台湾のインテリゲンチャには決して出現することはありませんでした．これは日本の例と極めて似ています．欧米の先進文明に相対して，日本の明治維新のインテリゲンチャの目標は，ほとんど欧米の文明と制度に熱心に迎え入れ，欧米の制度によって欧米と競争し，自己の近代性を確立するものでした．

過去百年の台湾を振り返ると，この種の近代性の追求は台湾の歴史における重要な主軸でした．この百年の間，近代性の或る側面については比較的満足が得られました．経済と科学のようなものです．何故ならば，それらの発展は，統治者の利益と合致するか，少なくともそれに反しないものであった為です．しかも，それらは短期間内で知識を最も得やすいものでもありました．しかし，政治上の自由と自立性の方は，長きに渡って抑圧を受ける境遇に在ったのです．そして，文化と近代の魂の開発という，育てるのに最も長い期間を必要とする側面は，更に遠く手の届かないものだったのです．これはまた，アイデンティティーの問題が，台湾政治において最

も顕著な議題となり続けている理由でもあります．そして文化とアイデンティティーは，ここ数年来，台湾のインテリゲンチャの公のディスコースにおいて最も重要なテーマにもなっています．

これらのディスコースにおいて，許信良氏の『新興民族』という書籍は，唯一この焦慮に焦点を当てて比較的系統立った論述を試みたものです．同書の貢献とは，台湾人に誇りと自信をもたらそうと試みた点にあります．これは，長きに渡って殖民統治，独裁者による支配と国際社会からの屈辱を受け続けてきた台湾人にとって，最も必要なものなのです．しかし，同書で台湾人の為に確立しようとしたイメージとは，新興の強権民族（例えばモンゴル，満州，オランダ等）を範とするものでした．それと台湾人の近代性への追求との間には何ら共鳴は存在せず，従って台湾においては余り大きな反響は起きませんでした．もしも，同書が確立しようと試みる台湾人のイメージが，古代アテネやルネッサンス期のフィレンツェを範としたならば，発揮した影響力は或いはまるで異なっていたかもしれません．

現在に至るまで，この種の近代性の追求は依然として台湾人の課題であります．それでは，台湾研究はこうした課題をどのように反映したら良いのでしょうか？台湾研究を論じる前に，社会科学の専門化の趨勢について述べておく必要があるでしょう．先に挙げたように，社会科学の芽生えと成長は，主に知識階層がその当時の社会の課題に直面した結果です．しかし，社会科学が段々と「成熟」し，且つ巨大な学者のコミュニティーと専門領域に発展していってからは，社会科学の研究も徐々に専門化，技術化（果ては細分化）してゆき，徐々に公衆の関心から離れ，徐々に社会の抱える基本的困難と関わりを持たなくなってゆくのです．

「専門化」は社会科学の発展において避け難い現象ではありますが，この種の専門化の趨勢の中で，社会科学界には依然としてこうした流れとは異なる微かな声が存在し続けています．社会科学研究が公衆の関心と共鳴し社会の抱える基本的困難と関わりを持てるよう期待する声です．10数年前，Russell Jacoby は *The Last Intellectual* の中で，アメリカ社会科学の専門化傾向は，学術と社会知識とのズレをもたらしていると批判しています．50年代以降，学術界では社会の基本問題に対して発言できる能力の有る学者はほとんど現れなくなっていました．コロンビア大学の Hebert J. Gans は，その1988年のアメリカ社会学会の会長講演において，やはり同様の反省を述べています．アメリカ社会学のフラッグシップ的な刊行物である AJS では，あれだけ多くの学術論文が有りながら，アメリカ社会の重要問題について論じているものは一本も有ったためしがないと指摘しているのです．こうした現象をもたらした原因は，一つには，当然，社会科学者の「心無さ」(mindlessness) が有りますが，もう一つの原因とは体制と制度です．学術界では，益々数量で就職と昇進が決定されるようになり，学者は益々出来高制の労働者に似てきており，社会の基本問題を深思熟慮するインテリゲンチャでは無くなっています[8]．しかしながら，そうであったとしても，アメリカの社会科学界では依然として極めて優秀な研究者がこうした趨勢に対抗しようと絶え間なく試みており，社会の難題に向き合おうと試みています．これらの難題が文化や思想或いは公共政策であろうとです．しかも，社会科学者のこのような自覚と自省は，アメリカにおいて益々強くなってきているようです．

台湾の社会科学者の多くは，社会科学の成熟期にあるアメリカで訓練を受けていることから，研究者であれ学術行政に責を負い学術資源を握っている者であれ，皆一様に社会科学成熟期の症状を呈しています．それは則ち，専門化と技術化です．台湾社会科学もそれ故，過度の「早熟」の現象を有しているのです．この種の過度に早熟気味の専門化現象は，一般的には，台湾の社会科学研究に強度のテクニカルな傾向を持たせることになり，社会の基本的難題や一般民衆の関心とはかけ離れさせてしまったのです．ここ数年，台湾の学術行政管理者とその他の学術資源を掌握している者の社会科学に対する理解（果ては品位）は，此処で言うそれらのものとは非常に大きな隔たりが有ります．彼等の熱心な推進の下で，未来の台湾の社会科学研究は益々テクニカルなものになっていくでしょう．台湾社会の基本的難題の研究は，ますます奨励されないものとなっていくでしょう．何故なら，社会の基本的課題と難題を研究することは，そもそもが比較的困難で長期に渡る仕事であり，成果の比較がはっきりとしない仕事でもあるのですから．これは，台湾社会科学の危機の一つであるというべきです．

しかし，このような不利な雰囲気の下にあっても，最近の少数の台湾社会科学者は依然として異なる声を上げ続けています．台湾大学社会系の曾女燕芬教授の苦心の運営の下，最近数号の『台湾社会学会通訊』の幾つかの文章は皆，社会科学者は同時に「公共的インテリゲンチャ」の役割も演じるべきであると呼びかけています．当然，彼等のアメリカでの同業者と丁度同じように，未来においてこうした役割を演じる意思の有る学者は，やはり専門化・技術化（更には細分化）の趨勢と苦しい戦いをしなければならないでしょう．しかも，長期の孤独にも耐えなければならないかもしれません．

高度の「専門化」，或いは「成熟」は，台湾の現在の社会科学に極めて顕著な現象です．しかも，将来は更に顕著になるばかりでしょう．ここではこれらの専門化の研究に就いて議論することはいたしません．ただ言えるのは，我々が想像しうる如何なる領域と題材であれ，それがどれだけ伝統的なもの，或いはどれだけ斬新なものであれ，台湾では何らかの形で研究している人間がいるということです．

台湾研究を論ずる上で考慮しなければならない第二点とは，社会科学の台湾の重要問題に対する研究は，実はここ数年始まったばかりであるということです．独裁統治は学術思想の天敵であることを我々は知っています．独裁統治下においては，客観的研究に従事することはほぼ不可能です．社会と政治についての知識はしばしば独裁政治の正統性に挑戦することになるためだけではなく，独裁政治とそれがもたらす荒んだ結果こそが，分析されるべき主要な難題となるからなのです．これは，社会科学が中国で芽吹くことができないだけではなく，経済が極めて近代化されているシンガポールにおいてさえも成長できない理由なのです．そうした社会においては，単に社会政策と関連し，独裁政治の安定に寄与するという研究が最も望ましい状況なのです．台湾は独裁統治を離れて10数年の時間しか経ておりません．このような短い時間の中で見るべき成果を積み上げることは，余り有りうることではありません．日本では社会学者だけでも2千人余りいるのに比べて，台湾の社会学者はおよそ200人余りしかいないことを考えると，政治学者の数は更に少なくなります．人数が希少であり領域がやたらと多い上に，繁雑で重い教育業務の負

担もあるので，短期間内に見るべき成果を積み上げるのはかなり困難なことなのです．

従って，以下に論じるのは，どちらかと言えば，台湾の政治学研究への批判ではなく，むしろその反省と期待になります．

過去10年の台湾の社会科学研究を振り返ると，地方派系政治の研究は非常に顕著な地位を占めています．およそ過去10年の間，台湾の社会科学（特に政治学）界で最も研究されてきたテーマの一つです．一定の時間を置く度に，新しい学術論文，或いは学位論文，或いは研究計画が出現します．これらの研究の大部分は，私がシカゴ大学で書いた博士論文の理論枠組みを踏襲したものです．私の当時の主要目標は，実のところ，地方政治を分析することに在った訳ではなく，むしろ更にハイレベルの問題に在りました．即ち，国民党の権威主義体制は何を以って見知らぬ土地である台湾で安定を維持することができ，ひいては根を下ろすことができたのかという問題です．国民党の権威主義統治，及び白色テロルの下での公共生活の不健全さは，近代性を求める如何なる人間にも納得することのできないものです．しかも，この問題の回答を通じて，我々は当時の台湾の政治生活と政治の営みの本質を理解することもできるかもしれないのです．従って，当時のアメリカ政治学で主流の問題意識が権威主義体制の崩壊であったにも関わらず，私は権威主義体制のコンソリデーションについて解答を出そうと試みたのです．論文においては，権威主義統治のエリートと地方政治家という二つのエリート集団の二元分立，両者の間の「保護と忠誠」の交換関係，及び「操作と統制」の支配関係，地方派系の組織と動員の運用，権威主義体制が特に打ちたてた非常に膨大な個人的利益の分配メカニズムについて議論しました．

私が異なる政治的関心に基づいて行った研究枠組は，意外にも台湾社会科学界の地方派系への高度な関心を引き起こしました．その後に，非常に多くの研究が殆ど同じ概念と理論を用いて地方派系政治を研究しております．これらの数多くの研究はまた，より詳細な資料によって，私の多くの論点に捕捉と支持を行いました．しかしながら，これらの多くの研究と論文は，資料はかなり豊富で多くの異なる地方のケースを使ってもいるものの，理論においては，私が先に出した視野を決して超えるものではありませんでした．これらの研究には二つの現象が存在します．一つ目は，益々精緻に細分化し，益々ニュース報道のようになってきていることです．二つ目は，高度の重複です．多くの研究は単に新たな地区を用い，新しい資料を収集し，とっくに出ている論点を証明しているに過ぎません．この現象を生み出す原因とは，主に，台湾が民主化した後に，元から有った問題意識が意義を失い，しかし新たな問題意識の方は生み出されないままであるということにあります．この現象から，社会科学研究がもしも中心の問題意識を失うと，どれほどつまらないものになってしまうのかを見て取ることができます．

もしも，地方政治研究に新たな生命力を付与したいのであれば，我々の研究の焦点は現在の台湾社会の課題と関連の有るものでなければなりません．即ち，近代性の追求に資するものである必要があると考えています．この近代性とは，民主的政治生活の質なのです．政治生活の質は，多くの要素によって決定されます．地方基層の政治運営，地方政治家の育成，市民社会の生成といったものは，絶対に無視のできない重要な要素です．

その他に，台湾の近代性と最も関連しているテーマは，民主化の問題です．民主化の第三の波についての研究は，欧米では人気の有るテーマです．台湾の民主化のケース分析については，多くの欧米と台湾の政治学者が多くの文章を発表してきました．これらの文章には二つの顕著な特徴があります．第一に，非常に多くの者が，アメリカの学者のラテンアメリカに関する研究の結論を以って，台湾を分析する起点としていることです．台湾の民主化を四派の間の合従連衡がもたらした成果とするものです．この四派は統治集団内部の開明派と保守派，そして反対運動の中の穏健派と急進派です．しかし，こうした分析は台湾の歴史的経験には決して合致しません．第二の特徴とは，独裁者蔣経国の民主化に対する貢献を強調するものです．この論点は一般人の常識とは，非常に遥か遠く隔たったものです．この種の解釈を持ち出す政治学者は，蔣経国統治下での白色テロル，及び美麗島事件での民主運動に対する厳しい弾圧を持ち出したためしが有りません．しかしそれにも関わらず，蔣経国が台湾の民主主義に対して大きな貢献をしたというのが，台湾と一部のアメリカの政治学者の結論なのです．

私自身は，どちらかといえば民主運動と政治理念の働きを重く見ています．一部の人民の道徳と価値理念は，台湾の民主化の最も重要な原動力であったと考えています．社会を進歩させる如何なる原動力であろうと，すべてこうした価値理念から来ているのです[9]．この要素の出現・成長或いは衰退を理解することは，台湾が近代性を追い求めるためには非常に重要な意味を有しています．特に，今日の台湾においては，多くの価値理念，例えば台湾アイデンティティー・反核・社会平等といったものは，全て主流メディアと政治的指導者（民進党の総統であってさえ）によってイデオロギーであると誹謗されているので，価値理念が社会の進歩に対して起こすであろう働きを理解することは，更に差し迫った任務なのです[10]．この点に関して，私はあるアメリカの社会学者が言った次のような説明に同感します．民衆が生み出す価値理念は，社会生活に非常に対して重要な結末を持っている．しかし，我々は現在に至るまで，それに対して全く何も研究していないし，更にはどのように研究するのかもはっきりとは知らないのである[11]．

過去10年間，もう一つ比較的よく研究されている領域は投票行動です．台湾政府が研究経費のサポートに極めて気前がよいことから，民主化から現在に至るまで，ほとんど毎回の全国的選挙において同時に二つの研究群が存在し，全国を範囲として訪問調査研究に従事しています．かなり多くの研究経費を投入してから，我々はいくつかの研究論文を世に出しております．現在までに獲得された重要な成果は，第一に，アメリカの投票行動理論の正確さを証明できたことがあります．これには，政党アイデンティティーがとても重要であり，政見と候補者のイメージ・施政成果といったものも非常に重要であるということも含んでおります．第二に，族群意識と民族アイデンティティーが政党アイデンティティーの重要な基礎であるということ（民進党の支持者は比較的台湾独立を支持する傾向があり，国民党と新党の支持者では比較的中国統一を支持する傾向がある）．第三に，民衆の李登輝への愛情（「李登輝コンプレックス」と呼ばれる）もまた非常に重要です．第四に，もしも三人の候補者がいれば，選挙民はもっとも支持する候補に票を投じるとは限らず，候補者の当選可能性に基づいて「戦略的投票」を行います．多くの人々は恐らくこう聞くでしょう，何故あんなに多くの金銭を投じ，極めて高度な統計を用いて，これらの皆が知ってい

るようなことを発見しようとするのかと．この難しい問題について，私には良い答えはありません．

私にはただこういうことが言えるだけです．投票行動は必ずそうなるとは限らないと．民主体制において，民衆の投票行動（彼等の態度・イデオロギーそして関心）は，誰が統治するのかを決めるだけではなく，政府と政治生活の質をも決定します．昔の社会科学者は我々が現在そうであるように幸運であったことはありません．多額の経費と精緻な方法を利用して，同胞の政治・社会・経済の態度を深く理解するなどということは無かったのですから．社会科学の古典的著作はアンケート調査と統計を使うことは殆ど無いけれど，もしもトクヴィル，更にはアリストテレスがこのような資料と方法を使いこなしていたら，彼らはあんなにも想像力の有る重要問題を出してくることができたであろうか，と私はよく考えます．

台湾が近代性を追い求める過程の中で，最も早く出現し，最も長く持続し，また最も一般民衆に遍く感じられているのは，アイデンティティーの問題に違いありません．アイデンティティーが関わってくるのは，「私は誰？私と彼らとは何が違うのだろう？私の存在する意義と価値とは何なのだろう？」等々の自己を確立する希望だけではなく，強権による支配から逃れるという独立自主の要求へと更に関わっていくのです．こうした自尊と自立性は，主流メディアと政治家にはマイナスのイデオロギーであると見なされますが，これは近代性の最も重要な心理的特徴の一つなのです．何故現代世界において，アイデンティティーを核とした運動（エスニック運動であれ或いは民族運動であれ）が，グローバル化の趨勢の中で消滅しないばかりか，逆に益々勃興してきているかの理由でもあるのです．民主化の後，台湾民衆は長きに渡ってアイデンティティーにおいて抑圧されてきましたが，終にそれを大っぴらにするチャンスを得ました．新たなアイデンティティーの主張，それと古いアイデンティティーとの衝突は，現在の台湾社会で最も顕著な社会的亀裂と政治的アジェンダを形作っています．そして，それ故に社会科学者の注目を浴びているのです．民族アイデンティティーは非常に複雑な現象であり，我々のこの問題に関しての研究はようやく始まったばかりなので，現在の収獲は未だ充分に豊富ではないのです．

現在までのところ，我々が民族と族群アンデンティティーの問題を研究して発見したのは，次のようなことでした．先ず，民族アイデンティティーと族群アイデンティティーとは高度に相関していること．次に，民族アイデンティティー・族群意識と政党支持もまた非常に大きな相関性があること．そして，民族アイデンティティーと族群意識は全て政治エリートの動員の影響を受けることが有ります．仔細に台湾政治を観察すれば，どのような人間でも同じ発見をすることができます．

この他にも，更に重要な幾つかの発見がありました．先ず，台湾では，半分近い民衆が特定の民族アイデンティティーを持っていないことです．台湾民衆の民族アイデンティティーには高度の浮動性が有り，全体の傾向の変化の幅が非常に大きいだけではなく，個人のアイデンティティーもまた，完全に固定して落ち着くということはほぼありません．しかしながら，これらの発見は単なる研究の起点に過ぎません．もしも，民族アイデンティティーの形成（或いは不形成）の歴

史条件と社会過程を我々が正確に理解できたら，それは知識上の素晴らしい成果なのです．しかし，同様に重要なのは，もしもアイデンティティーが近代性の重要な価値であるならば，この重要な価値は如何にして現実利益と強権的パワーの影響を受けるのかについて，理解することです．

民族アイデンティティーは，あたかも現在の族群衝突の唯一の根源であるかのように見えます．台湾の経済は短期間の間に急速な近代化を遂げたことから，本省と外省の族群との間には「文化的分業」(cultural division of labor) は出現しておらず，同じ族群が同時に政治権力・経済利益そして社会的地位を握っていたのです．民主化の後になって，族群を境界線として形成されていた，支配と被支配の範囲も消滅したのです．現在の台湾の族群間のかなりはっきりとした差異とは，民族アイデンティティーの亀裂です．これは現在の台湾政治の最大の衝突点です．我々の研究では，外省人は依然として中国人のアイデンティティーを保ってはいるものの，彼らも次第に政治的公民意識に傾きつつあり，自らを台湾人と位置付けていることを指摘しました．そして益々多くの本省人は，中国人アイデンティティーを投げ捨てており，「台湾人」の族群文化意識を新たな民族意識に発展させているのです[12]．両者のアイデンティティーは衝突する部分も有りますが，その中にはやはりコンセンサスの部分もあるのです．台湾新民族の形成過程において(もしもそれが終に形成されうるのであれば)，族群衝突の本質を理解し，且つ公に発言するのは，社会科学研究者の担うべき任務の一つなのです．

以上が，最近10年来の台湾社会の基本的難題と比較的関連した研究領域に関しての私の反省です．社会科学は人文の学科であり，文化と人文の訓練は経済と科学の活動とは異なる以上，その累積にはかなりのゆっくりとした時間が必要であり，場合によっては数世代の時間が必要です．以上の反省と批判が単に短期間内の現象であればよいと期待しています．この得がたい機会をいただきましてありがとうございました．

注

1) Stefan Collini et al., *That Noble Science of Politics*. Cambridge University Press, 1983.
2) Dorothy Ross, *The Origins of American Social Science*. Cambridge University Press, 1991.
3) Dennis Smith, *The Chicago School : a Liberal Critique of Capitalism*. St. Martin's Press, 1988.
4) Robert A. Nisbet, *The Sociological Tradition*. N. Y. : Basic Books, 1966.
5) 陳紹馨，「新學藝在台灣的傳播與發展」，陳紹馨『台灣的人口變遷與社會變遷』．台北：聯經，1979.
6) Richard Tarnas, *The Passion of the Western Mind* (N. Y. : Ballantine Books, 1991), 282.
7) 林博正編，『人生隨筆其其他：林攀龍先生百年誕辰紀念集』．台北：傳文，2000.
8) Hebert J. Gans, "Sociology in America : the Discipline and the Public, " The Presidential Address. *The American Sociological Review* 54,1 (1989) : 1–16.
9) 呉乃德，「精神理念在歴史變革中的作用：美麗島事件和台灣民主化」，『台灣政治學刊』 No. 4 (2000): 57–104.
10) 人類が如何なる価値理念への帰依を生むのかは，我々にはまだはっきりとはわからないが．この重要問題に関心がある向きは Hans Joas, *The Genesis of Values*. Polity, 2000 を参照されたし．
11) Mochael Hecter, "Agenda for Sociology at the Start of the Twenty–First Century, " *Annual Review of Sociology* 26 (2000) : 697-98.
12) 呉乃德・沈筱綺，「公民國族和族群民族：台灣民族形成的兩個路徑」，未刊行論文．